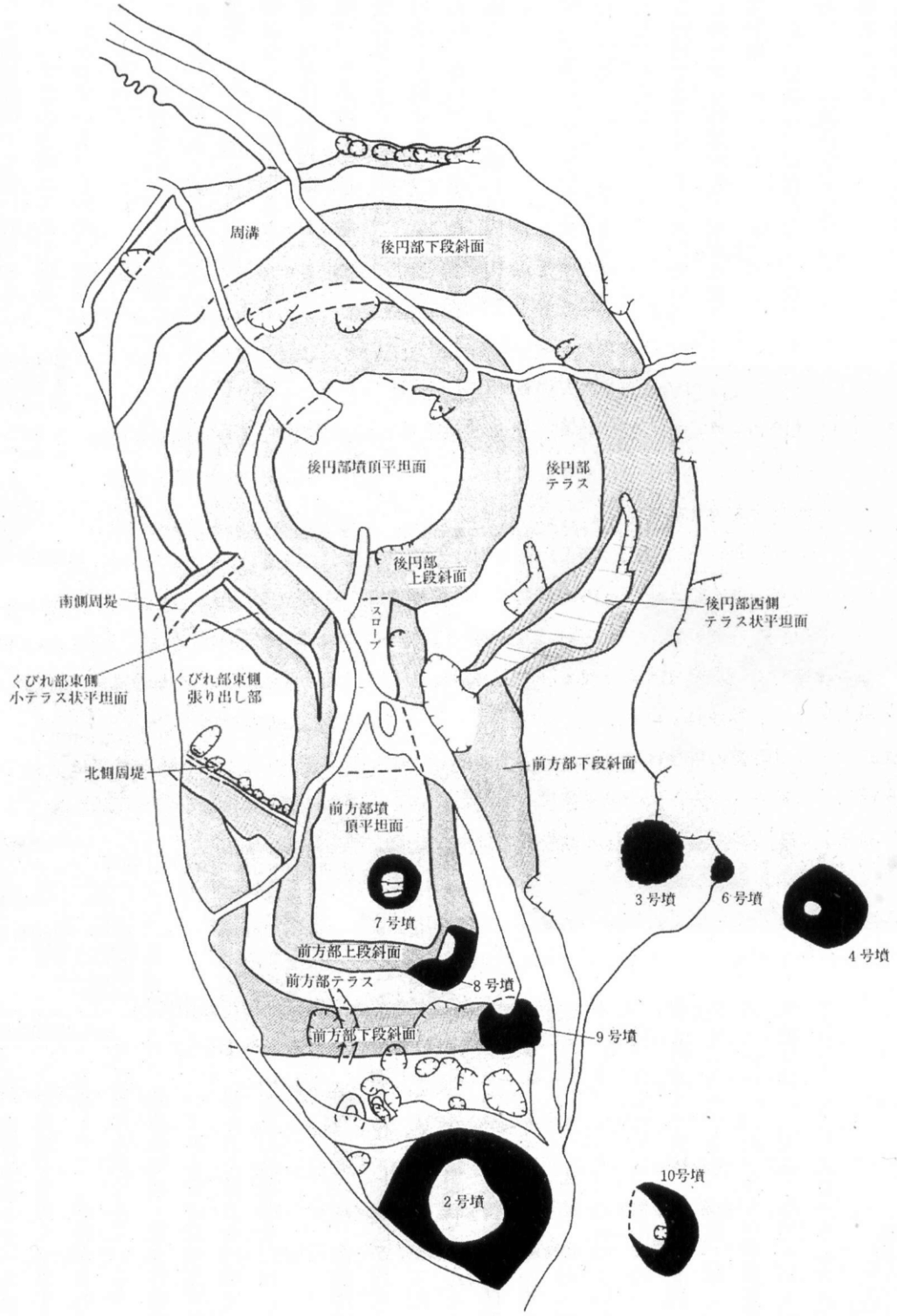


第6図　会津大塚山古墳模式図

容は前期のものとみて差し支えなく、その後行われた発掘調査で出土した土器は前期でも古い時期のものが主体だった。したがってこの古墳は墳形や埋葬施設の内容がほとんどわかっていないものの、前期前半の古墳である可能性が高い。

以上をふまえると、会津に前方後円（方）墳が現れてくる過程を、次のようにまとめられるだろう。まず、早期（弥生終末期）における墳丘墓の出現で、この段階に前方後円墳はなく、四隅突出墓など弥生的な方形の墓が現れる。つぎは前期初頭における小型低墳丘の古墳の出現で、この段階では方墳と前方後方墳という方形原理の墓を主とする中に、ごく少数の小規模な前方後円墳が登場する。つぎはここで紹介した前期前葉における高い墳丘や優れた副葬品をもつ中型古墳の出現で、前方後円墳と前方後円墳が中心的位置を占める。

つまり、大型の古墳は突如として現れたのでなく、初期の小規模な墓から、次第に形や大きさを変化させていく中で登場したことがわかるのである。ただし、この変化は単純な発展ではなく、その過程で何度かヤマト政権をはじめとする外部からの重要な働きかけがあったことは想像にかたくない。また、このような過程を把握できる地域は、現在のところ東北では会津が唯一であり、その調査成果は東日本の中できわめて注目を集めている。

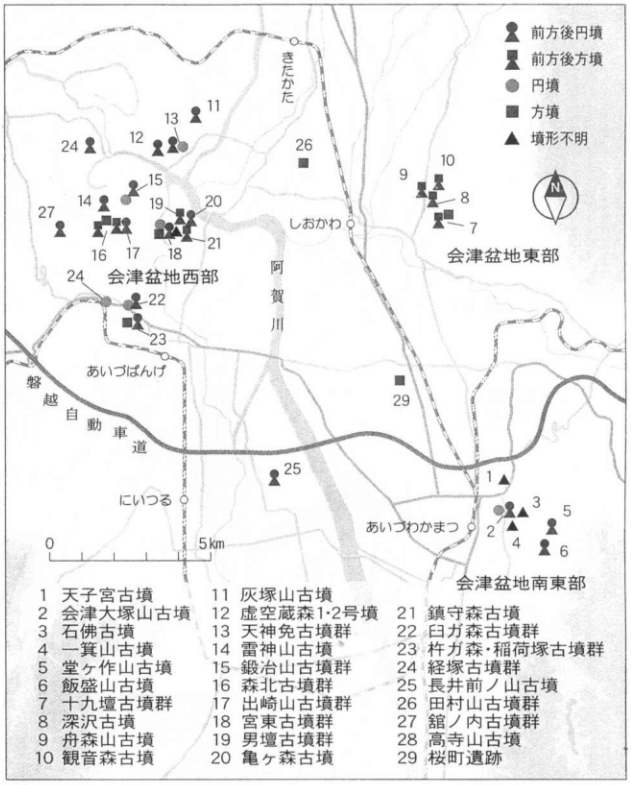
そして、いよいよ次の段階で、東日本有数の大型古墳が会津に登場するのである。

大型古墳の築造

大型古墳とその分布

前期前葉から中頃（三世紀末～四世紀初）、五〇メートルを超える大型の古墳が現れ、前期末（四世紀後半）まで盛んに築かれる。これらは現在、会津若松市一箕町周辺の盆地南東部、喜多方市塩川町駒

地南東部の古墳　北西から見る。



会津盆地の大型古墳

る。今後この三ヵ所以外で大型古墳が見つかる可能性もあるが、現在の分布状況からは、会津盆地を大きく三分するような有力集団が存在したことが推測される。以後、各地区の代表的古墳をみていこう。

飯盛山古墳・堂ヶ作山古墳

いずれも会津盆地南東部縁辺の急峻な山上に築かれた前方後円墳で、つぎに触れる大塚山古墳の発掘調査以後、その存在が確認された。

飯盛山古墳は、白虎隊で有名な飯盛山の山頂にある。測量図が作成されており、大きさが六五メートルほどで短い前方部をもつ。これ以外の情報はほとんどないが、山上という立地や墳形の特徴から前期でも比較的古い時期のものと考えられ、盆地南東部の大型古墳の中で最も古い可能性がある。その検証はこれからの課題であり、詳しい内容の解明が待たれる。

堂ヶ作山古墳は飯盛山古墳から旧滝沢街道の通る谷をはさんだ北側にあり、北西に大塚山古墳を見下ろすことができる。平成二年（一九九〇）から三回の発掘が行われ、多くの重要な成果が得られている。古墳は狭い山頂部と尾根を最大限生かしてつくられており、そのため整った前方後円墳にならないこと

古墳（1999『会津若松市埋蔵文化財分布調査第49図をもとに作成）